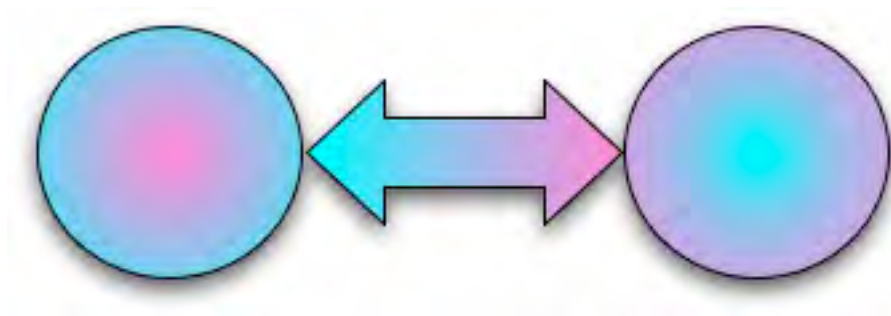


安心感を返していく

強度行動障害の理解と対応



金沢信一

「安心感を返していく」

強度行動障害の理解と対応

社会福祉法人同愛会日の出福祉園開設準備室

NPO 法人全国障害者生活支援研究会

金沢信一

はじめに

過適応状態？ 共依存状態？

① 過適応状態

怖い支援者がいるとその支援者に無理をして肯定的に対応し、それをさらに強めることで安心感を得ようという人たちがいます。その様な人たちを過適応状態？と考えます。

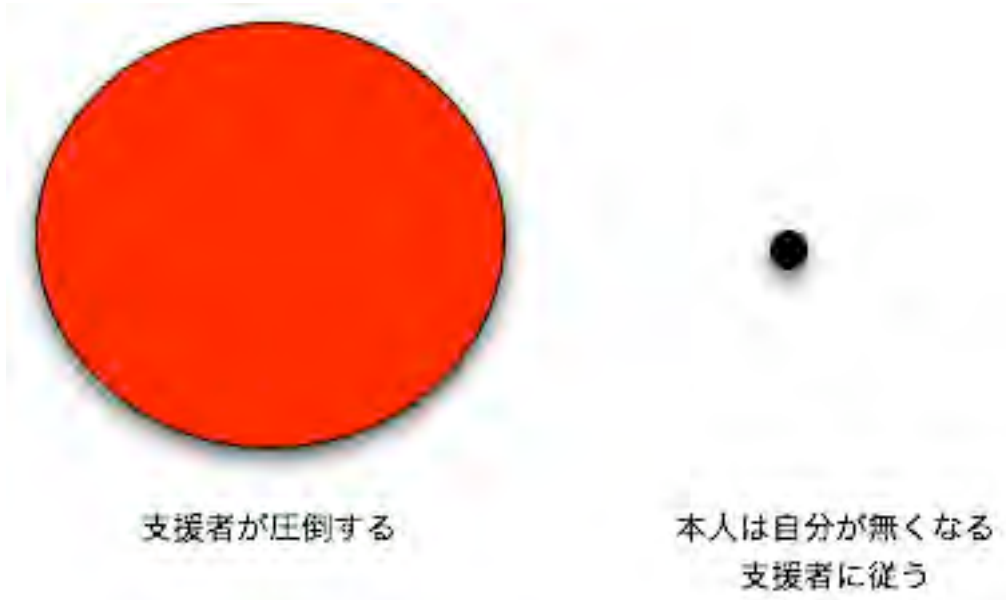
「威圧的指示による恐怖で追い込み、本人が少しでも受け入れると誉める」という本人の逃げ場を断ち、囲い込みのような状況をつくり、その中で圧力をかけ、支援者に向けば安心感を与える、相手にとって指示を受け入れるしか逃げ道、安心感を得られる方法はなく、無理をして受け入れる、受け入れさせるという飴と鞭のようなやり方は一見本人の行動をコントロールするわけですが、その実は本人に過適応を強いる技術であると思います。この様な扱いを受けてきた知的障害の人がいるのではないのでしょうか。多くいると言っても良いかも知れません。支援者は自分の顔をチェックしてください。眉間にしわなど寄っていませんか。声が威圧的になっていませんか。

ところが、少くもスパルタでもその支援者の熱意と解し、自分の子どもが少しでも何かが「出来るようになる」ことを求める親御さんが多いです。良い支援の証明としてその声に応え「出来るようにしている」支援者、教育者もいます。その気持ちは分からないではありません。子は、多分、そんな親の気持ちを受け入れようとするでしょう。大変切ない状況がそこにあります。勇気を出してあえて言えば、そんな状況から無理をし、行動障害に至っている人がいるように思います。

実行するのは本人です。やる、やらないの判断をするのは本人です。本人のモチベーションを欠いた他者が決めた目標への訓練的扱いを行うのは古い体質の支援者に多いように思います。こうしたモチベーションを欠いた使役の訓練を受けると反発するのはまだ良い方で、徐々に自分を失っていきます。この様な扱いは受けている側から見れば障害を有する状態に対する「いじめ」です。当然こうしたやり方は即刻禁止すべきですが抵抗は根強いです。管理的な必要性などもこうしたやり方を肯定するための言い訳になります。まずは、本人の訓練へのモチベーションを見なければなりません。

この様な状況にいた人は後遺症のような傷跡、癖をたくさん残しています。要するに本

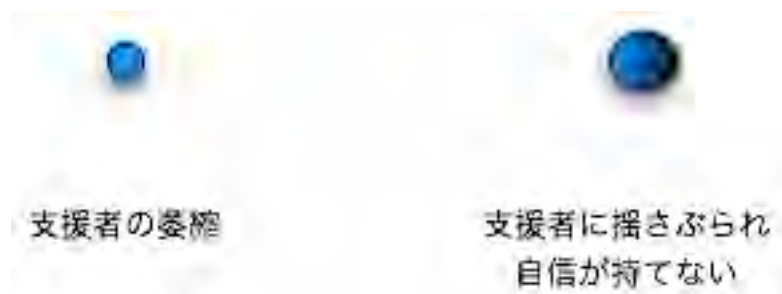
当の問題解決がなされないところで外側の訓練を受けてきたように思います。障害を持っていても競争原理の影響を受けた社会の中で暮らさざるを得ないところで見せかけの能力訓練を強いられてきたというべきこの様な状態にいる人は多いと言えます。



②共依存状態

それに対して支援者が自分の弱さを本人に投影し、本人を弱いものとして見て、腫れ物に触るような扱いをしてしまうことがあります。この様な扱いで本人の自尊感情は低下し、本人には自分は弱い人間であると感じられます。過適応を強いる支援者が威圧的で好ましからざるものであることは比較的わかりやすいのですが共依存的支援者は、一見感受性が高く、優しく見えます。しかし、ことさら本人の弱さを引き出してしまい、收拾のつかない状態に到らせ、本来の姿を自然に表出しているという見方をしがちです。行動障害を引き出す支援者の傾向はありがちな威圧的傾向だけでは不十分で、共依存的な傾向も言っておかなければなりません。

過適応を強いる支援者も共依存を強いる支援者もいずれも自分の考えから柔軟になることが出来ずに他の支援者に対しても自分の支援を強いていく支配的で当事者の痛みを感じない原理主義的な傾向があります。

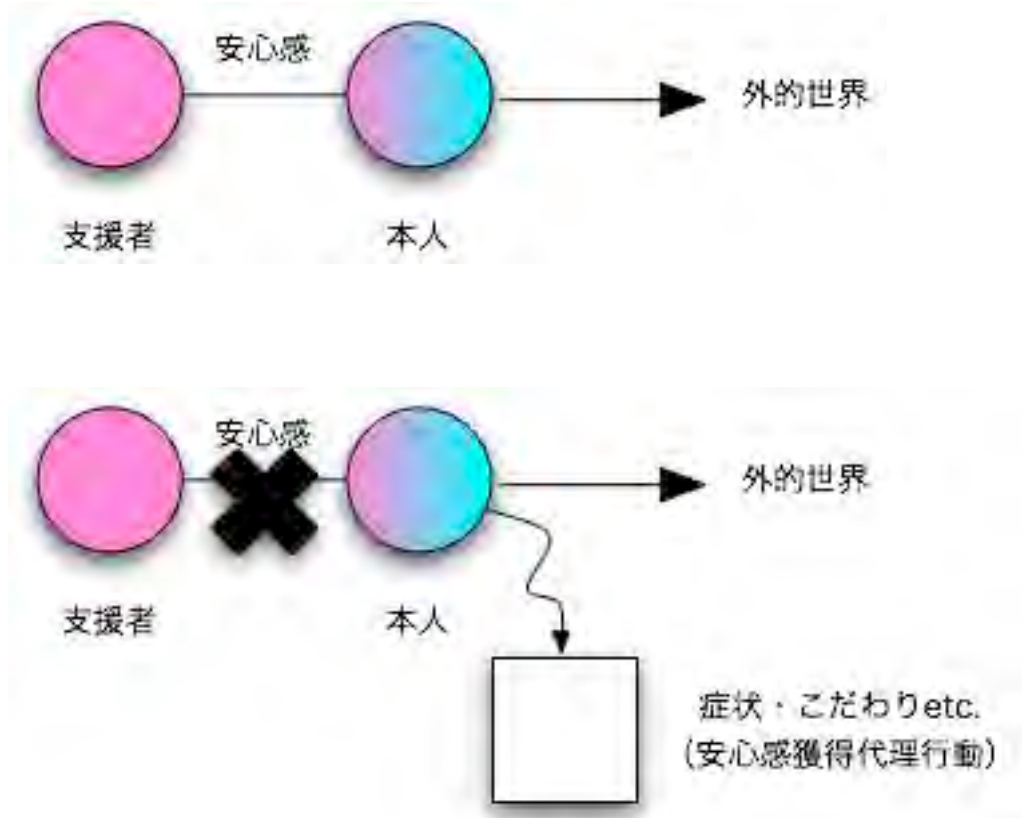


1 内的動因（思い）の変化

(1) この始まり・人とのつながり・安心感の喪失←代理物

強度行動障害とは外側から見ればその物差しである強度行動障害判定指針により示される一連の行動の起る状態のことですが、その様な言い方は、強度行動障害の外側であって、中味をとらえたものではありません。

本来、人は、絶えず他者との触れあいを行い、他者との繋合から安心感、信頼感を得て、不安感、不快感を解消し、内的平衡を保っています。人とのつながりで安心感が得られないときにそれに変わるもの、代理物が必要となります。同一性の保持、こだわり行動、常動行動など行動障害と言われるものは、人との触れ合いの中で安心感が得られない人がその代わりに内的平衡を得るために行なっていることではないでしょうか。絶えず声を出している人はその状態で自己の平衡を保っています。不安が強まれば声は大きくなるでしょう。過飲水の人水は多く飲むことで自分自身の状態を保っています。身体拘束でさえ、拘束された状態に安心感を持ち、拘束を解かれることで不安になり、拘束を求める人もいます。当然、一定の変わらないものの配置、一定の時間の経過というパターン化された時空間の中で平衡を得ていることも同じように理解されます。そして、そこでの最も適切な対応は、本人の安心感が得難い事情を理解し、その問題点を解消し、他者との心地よい触れ合いによる安心感、信頼感を回復することです。



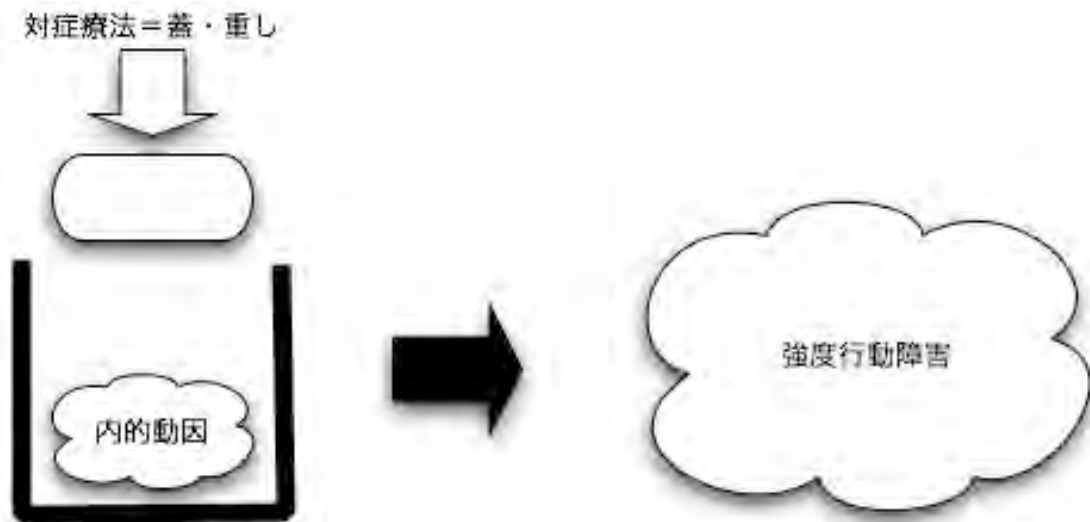
(2) 症状の抑圧、統制＝強度行動障害

多くの場合、受けとめる側は、行動障害様の状態が現れるとその原因たる内面の状態に着目するのではなく、対症療法的対応、原因があつて表出された「行動」への抑制的対処が行われる様に思われます。そして、抑制的対処の目的は、本人の内的動因が変化すること、内的平衡が得られることではなく、内的動因に関わらず行動障害が出ないことに価値が置かれます。

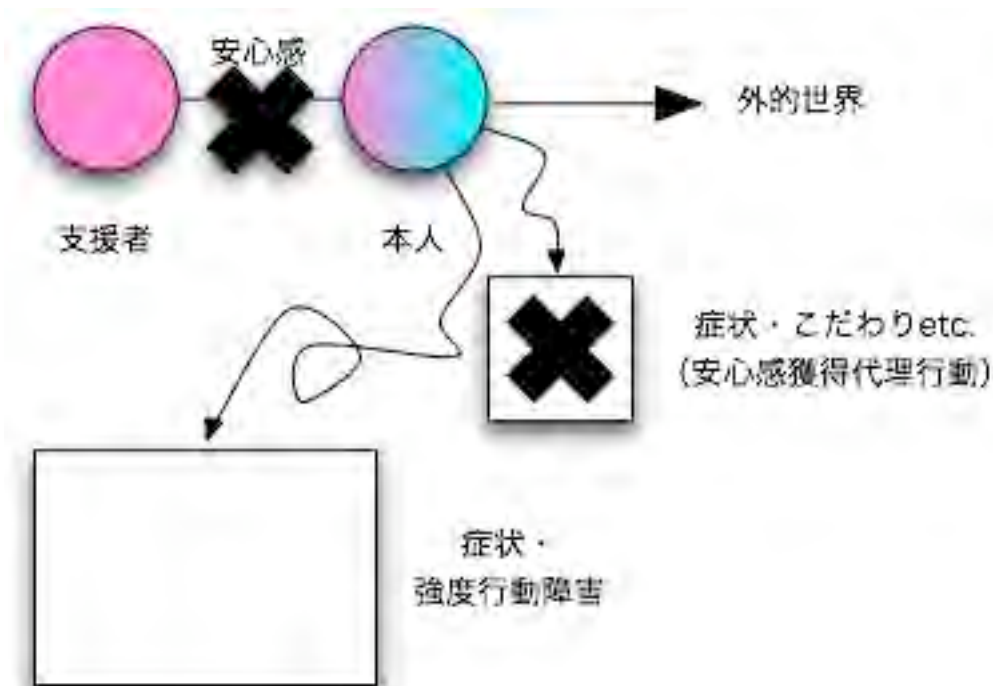
しかしながら、「行動障害が出ない状態」とは必ずしも本人の内的平衡が保たれている状態であることを意味しません。というよりも不安感が最も貯め込まれている状態であることがあります。ところが本人の周囲の人は、本人の内面に行動障害が何かしらの原因となる問題が存在することを問題にするのではなく、内的動因という原因を離れた行動障害が表出されることを問題にする見方になりがちです。すると行動障害が出ないように、出ないようにと行動障害について否定的な見方が周囲につくられてしまいます。その次に行動障害に対する抑圧的な見方がなされることとなります。その様な見方から本人と周囲の人との間に悪循環をつくり、ある一定の緊張ある関係性がつくられることとなります。その関係性はそれを感じた人から行動障害をむしろ引き出す一因となっていきます。

その様な周囲の人の見方の中で行動障害の表出は本人自身からも自制されます。そのために見かけは行動障害が無いような、蓋をされた状態がつくられます。しかし、行動障害の原因となる内的問題が解消されたわけではありません。まして、行動障害自体に内的平衡を得るための代理機能があるのだとすれば、それが得られない不安定な状態が周囲の否定的な見方により圧縮され、より強まり、さらにより大きな行動障害の原因をつくっていきます。この様な他者からの症状の抑圧からその反動として、より強まったものが強度行動障害であると考えられます。

人との交流を絶って閉ざされた中で自己の安定を図る状態を自閉的状态と考えれば、強度行動障害の状態とは自閉的対処を抑制され、自己の内的平衡を失った状態と言えます。また、自傷、他害、強いこだわり、感覚遮断などへの強い抑制、外界との遮断、強い緊張、強い弛緩、パターンに拘束されたくらし、身体拘束、薬物の使用などの対症療法を行なわざるを得ないことから、さらに、好ましいものを失うこじれた状態、收拾のつかない状態が周囲との関係の中につくられ、一方、外的世界へ進出し、主体的活動を行うための拠点としての人間関係＝人との触合いの中で安心感、信頼感を得るという内的平衡感を調節する機能がつくられないという根本原因を見失うことになりがちです。



.....



2 内的動因（思い）への支援

(1) 抑制により高められた警戒心への対応

他者からの抑制的なはたらきかけに極めて敏感な方を知っています。ほんのわずかな内面のはたらきを感じ、読み取ってしまいます。多分他者に安心出来ず、他者から抑制的雰囲気を感じるとフラッシュバック的に警戒心が高まり、飛び出し行動が反射的に起こるのでしょう。その方は、支援者から見ると何の前触れもなく、ぱっと飛び出すかに見えるの

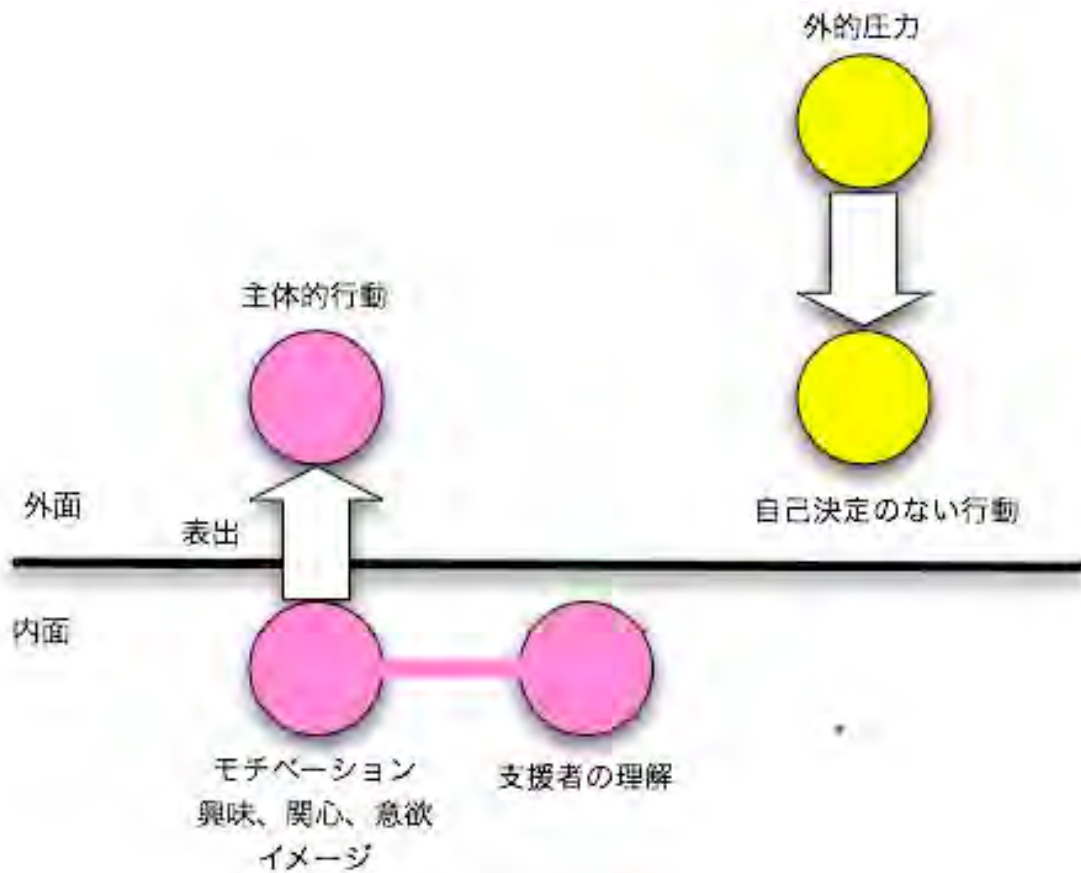
ですが、よく見ると支援者は、その人を見ると飛び出しを感じ、その人を抑えるような動きをしています。それは無意識的な反射に近いことなのかも知れません。誰でもその人の前に立つと飛び出しを感じ、抑えなければという気持ちのはたらきを引き出されてしまいます。その方は、その様な支援者の内面のはたらきを感じるとぱっと飛び出してしまいます。早く相手の気持ちを察知しなければ安心感が妨げられるのだと思います。そのくらいに警戒心が強いということになります。本人の飛び出し行動を誘発する支援者の内面のはたらきがあり、それは本人の内面のはたらきから引き出されています。そこで支援者が本人からその様な内面のはたらきを引き出されなければこの素早い、電気の流れのような関係の反射的はたらき合いは起こらないということになります。この方への支援は、支援者がご本人を脅かすような内面のはたらきを行わないということ伝えることに工夫がいましたが、次第に警戒心が安心感へと変わり、弛緩し、脱力していきました。

そこで強度行動障害への支援とは、その激しく表出される行動障害に惑わされずに、行動障害から本人と周囲を守りながら、その最も始めの問題である内的平衡につながる他者との好ましい関係性による安心感への支援を行なうということになります。ところが激しい行動の抑制、抑圧、拘束、虐待に過ぎないものが強度行動障害への支援と言われていることがあります。先頃問題となった福岡のカリタスの家で行われていたことなどはまさにそうしたものであると思います。このことは遠い彼方の話しではありません。養育者、支援者は、その様な状態に陥る危険性があります。そこで確認すべきは、強度行動障害に限らず、自閉性障害の人への支援は、その行動面ではなく、本人の内的動機や他者との関係性について行われるべきである、ということです。



(2) 本人の主体性に結びついた活動支援と支援者の思い

自閉症関連施設では作業訓練が盛んに行なわれているところが多いです。これは作業を通して本人との触合いと主体的はたらきを支えるということであると思います。ところが芸当のような作業をさせ、それが良い支援が行われている証のような虚偽威しの言い方には疑問を感じています。自立とは他者に強いられたものではありません。他者に強いられ、動かされている状態を自立と言うのでしょうか。それは自立の妨げです。逆に放置すること、何も機会を与えない扱いが良いことでもありません。ただその人が例えば何もせずに寝ているとしてその状態には何の意味も、価値もないのでしょうか。これらの議論には本人自身の気持ちが欠落しています。自立とは、自己決定という前提に基づいていなければなりません。「しごと」をしようという自己決定は、安心→信頼出来る養育者、支援者の関係性による支えの中でアッハ体験(自分の予想外の好ましい変化にハッと気づくこと)として、ピグマリオン効果(「マイフェアレディー」のように、支える人の思いが込められ伝わり育つこと)としてつくられていくものと考えられます。「しごと」体験の中で主体性などという状態とはほど遠いと思われた人がイメージアップし、主体的になり、大きく変わっていくことがあります。それは自閉性障害と言われていた人が障害の無い人と何も変わらない希望や夢を持ち、伸びていこうとしている存在であることを意味します。



3 関係性の問題・支援者自身の問題

(1) 「思い」のキャッチボール

本人や支援者の思い=内面の活動は、その眼差しや振る舞い、行動、ことば、感情として絶えず表出されています。支援者は、自身の自覚、無自覚にかかわらず、ご本人のその場の「思い」を直接受け止め、その思いを取り入れた自身の「思い」として返す、という「思い」のキャッチボールを絶えず行っています。内面の活動は「自己」、「主観」と言うべきものであり、思いのキャッチボールとは自己と自己との結びつき、「対人関係」、「間主観性」というものではないでしょうか。



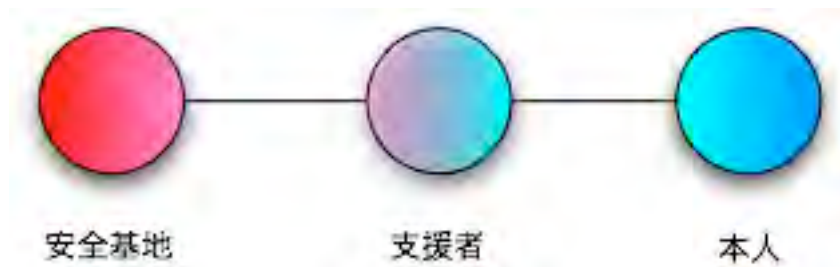
(2) 安全基地

本人と支援者との関係は、外界における本人にとっての安全基地となります。本人は安全基地を拠点にして外界に対して探索的活動を行い、知的発達を遂げていくと考えます。外界に困難があり、不安、深いが高まり、危機感、警戒心が高まったときに本人は安全基地に戻ります。安全基地には支援者がいて本人の内面に抱える困難な問題を理解、解決し、不安を安心に変え、不快を快に変えます。本人の危機感、警戒心は安全感、安心感、信頼感、有能感に変えます。この様な安全基地と言うべき人との関係を有しているか、いないかによって本人が外界に於いてそれを頼りに活動を行っていけるのか、迷走していくのか、大きく違っていきます。そこで本人にとっての安全基地となることが支援者の役割であるということになります。

このことは同じように支援スタッフ、親にも支援者にも言えます。親や支援者にとっての安全基地となる後方支援者が必要です。親を支えてくれる人が必要です。そうでないと疲弊し、子への愛故に過適応し、強度行動障害と渡り合うためにハイパー化する親御さんが多いのではないのでしょうか。そうでもないとやっていけませんから。しかし、そうした状態を戻してくれる後方支援者がいたらどんなにか良いのかと思います。自閉性障害、強度行動障害への支援、だけではないのでしょうか。支援スタッフにその様な構造があると良いと思います。

支援者に対して倫理綱領などで権利侵害に到らないために重しをかけることは当然です

がそれだけでは十分ではありません。強度行動障害の人への支援を行うことには並はずれた受容力を求められます。そこに無理がはたらかないとは限りません。支援者のそうした内面への配慮をしなければなりません。



安全基地については乳児院などの調査をしたボウルビーが言ったことで、乳幼児期に母親との愛着が成立しているかいないかがその後の発達に大きな影響があることを言っています。これについては三歳児神話という言い方での反論もあります。これについて支援実践の立場から言えることは、大人である成人の知的障害者に母親や支援者との間に愛着を成立させようというところから、様々な抵抗が相互につくられます。愛着と言うよりは安心感、好意というものが成立することでバランスがとれるように思います。愛着に不安が重なればバランスを欠き、むしろ強い葛藤をつくり、相互に苦しさを作り、共依存的な傾向を帯びる可能性も高まると思います。その違いは大きなものだと思います。安全基地に身を委ねることで暮らしにくさ、堅さをつくっている歪みが弛む、肯定的な自己活動が可能になることに意味があると私は考えます。しかしながら、極端な愛着や赤ちゃん返りを求めることは、相互の新たな暮らしにくさ、苦しさを生む苦行、荒療治であるように感じます。

(3) 行動の脅威と原因の見えにくさ・支援者の側の不安と統制

私は、「受けとめる側は、行動障害様の状態が現れるとその原因たる内面の状態に着目するのではなく、対症療法的対応、原因があって表出された「行動」への抑制的対処が行われるに思われます。」ということは初めに言いました。行動障害を行う人の周囲にいる人から見ると、つまり行動障害を外側から見るとア、その行動の異様さ、あるいは何かしら助けなければならないことを迫られていると感じます。イ、しかしながら、何故その様な行動に到っているのかは、その行動が大きくなればなるほど見えにくくなっていきます。ア、の状態は異様に見えるものと支援者にイ、切迫して感じられるものとに分かれます。この違いは考えてみなければなりません。



①安心獲得のための代理行動

本人の行う周囲の人から異様に見える行動はその人なりの安定を得るための行動であることが多いように思います。例えば、手を縛るなどの身体拘束を受けている人がいるとします。これは地域社会の感覚から言えば虐待とも言える異常なものです。しかしながら、不幸なことにその人がこれまでの生育歴の中で人との関係が十分に育たず、人を頼りに自らを落ち着かせることが出来ず、身体拘束によって自分を落ち着けること、身体拘束により安心感を得て、信頼関係を形成してきたとしたらどうでしょうか。そんなものは安心感でも信頼関係でもないと言えそうかも知れませんが、手を縛って安定している人の縛りを解くことはその人の安定を崩すことになります。

この人への支援はどうすればいいのかと言え、言わずものがなのことですが、「支援者との関係づくり」ということになることはおわかりだと思います。しかし、この様な理解が成り立つには理解する人に「本人が身体拘束によって安心感を得ている」という認識が背景として存在することが前提になります。支援者にこうした認識がなかったらどうなるのでしょうか。誰もすぐさま身体拘束を解こうとするでしょう。ところが身体拘束を解けばその人はより不安になります。身体拘束を解くことはその人を拘束から解き放つことにはならず、より不安にしてしまいます。この様な認識が成り立つことも拘束＝安心という認識がなければわかりにくいことではないでしょうか。このようなところから支援者は、通常考えられる「良いこと」を行えば行うほど相手の混乱をつくり支援者自身もより混乱していきます。

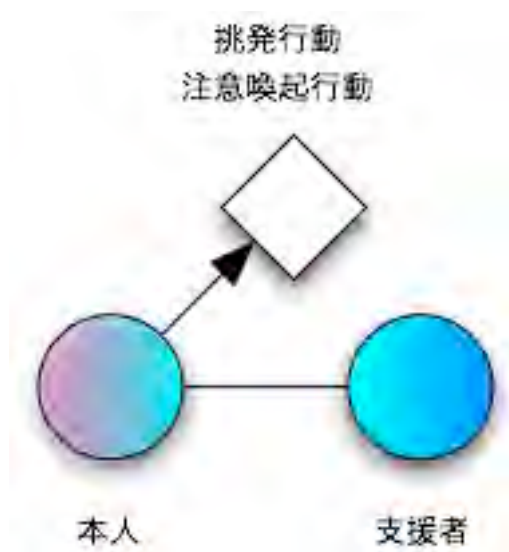
「身体拘束」を他の行動に置き換えれば多くの異様に感じられる行動の意味とそれが他者の受け止めによって混乱して行くことが理解出来るのではないのでしょうか。屁理屈を言っているようですが実際に支援をしている人にはよく分かってもらえるのではないのでしょうか。たかだかこれだけのこと、支援者に「本人が・・・行動によって安心感を得ている」という理解のあるなしで理解と対応は大きく違ってしまいます。良かれと思うことが相手にとっては安心感を揺らがすことであり、抵抗を生むことは当然です。その抵抗に支援者が苛立つことも自然な流れと言えそうです。



②注意喚起行動、挑発行動

周囲の人に見ていて手を出さざるを得ない気持ちにさせる行動には行う人の複雑な内面とこれまでの人間関係を感じさせます。単なる要求表現が成り立たないところで注意喚起行動や挑発行動が行われます。それが支援者との疎通性が良くなると注意喚起行動や挑発行動は減少するように思われます。自傷行為や他害もその様な意味合いを含むことがあります。支援者にはあてつけのように感じられる行動はその様にしなければ伝わらない関係性の中で生じています。支援者側の本人に対する統制的な気持ち（それが地域社会での常識に基づいた当然のものであったとしても）が背景として存在していることが本人の気持ちを自然に受け止めることを阻んでいることが多いように感じます。

このように一方の主観の状態(思いの状態)が関係の成立、相手に伝わる事が阻まれ、そのための代理行動として、関係構築試行行動として注意喚起行動や挑発行動が行われるように思います。



4 自尊感情・価値ある自分・毎日よろこびのある暮らし

よろこびのない日々が長期間続けばどんな人でもどうなっていくのかは言わずもがなのことでしょう。干からびていくことでしょう。毎日よろこびのない状態とはどういう状態でしょうか。何にもやることのない一日、誰にも喜ばれない一日、誰も来てくれない一日、その様な中で人は自分が価値のない存在であることを感じます。そんな一日が1年、2年と続いていたら人は力を失っていくでしょう。自分は本当に価値がないと思うようになるでしょう。

人はよろこびに向かって努力をします。よろこびは人との関わりの中でつくり、高まり、よろこびから自分の価値を確認し、育っていきます。よろこびをとらえ向かっていく揺るぎない内面のはたらきを主体性と呼ぶのではないのでしょうか。ことばを換えて言うと自尊感情という言い方になるのでしょうか。確かなよろこびを人との関わりの中で日々感じていくことは人としての存在証明であると思います。



5 支援のあり方のまとめ

発達障害の人への支援のポイントは本人の思いを受け止め、また本人の思いを伝えることです。つまり一人の人の主観、(思い)がもう一人の人の主観(思い)につながり、間主観性、相互の思いが相手と自分との間で行き来することへの支援であると考えます。行動障害の状態とはそれがうまくいきにくい状態で生じます。必要なことは、主観と主観との好ましいつながりによる相互の感情の行き来が、相手の感情に直接触れ、また相手に自分の感情をさらすことが心地よいこととして行われることです。

ところが行動障害が支援者に行動障害を統制しようという思いが持たれること、支援者の不安が生じることで好ましい感情の相互交流は妨げられがちです。

6 支援者間の共通言語の確立

以上述べたことは、特定の支援方法の立場に立つ人にも理解していただけることではないかと思います。残念ことに現状に於いて、支援者同志、あるいは違った組織、違った施設、違った法人などで、あるいは専門化された様々な療法の違いによって、用語も、考え方も異なり、そこでことばによるコミュニケーションを行うことは容易ではありません。ましてケースカンファレンスを行うことはその必要性を言うほど簡単なことではありません。悪い言い方ですが、感情的なヘゲモニーの取り合いになることにもなりかねません。支援を志す人同志が原理、原則的な神学論争に明け暮れているようでは救われません。その様な轍を乗り越えていくことが必要です。そのためにも支援者自身がそうした自分自身を理解し、(そうした私自身を理解し、) 変わらなければなりません。

7 支援体制、支援者間の連携

支援は実際に、具体的にどうするのが分からなければ役に立たないです。ただ、一つの支援を行うにあたっては様々な条件の中で成り立つことで、スタンドプレイ、ワンマンプレイでは限界があります。支援者の後方支援体制があるか、無いかで大きく違ってしまいます。サッカーで言えば、ゴールを入れた選手だけで試合は出来ないことと変わりません。サッカーではゴールを入れた選手が目立つ様に、支援も直接支援をしている人が目立ちますが、その人が支援をしやすくする配慮が不可欠で、そのためには直接支援者と後方支援者が一定の支援についてのイメージを共有していなければなりません。まあ、それは初めから無くとも検討しながらその都度つくっていけば良いのですが。そのためにも支援者間の共通言語が確立されている必要があります。

支援者間で共通言語が出来るためには支援者間でお互いを認めることが出来ていなければなりません。支援を理解していない人はそのあたりについての考えが安易です。支援を共有することは並大抵のことではありません。支援など簡単に理解出来る、変えることが出来ると思うのは大きな認識違いです。支援者自身の支援の誤りに気づくことも簡単にはいきません。それは支援者の周辺にいる人に是非理解して欲しいことです。支援は、講義を受ければ出来るというような簡単なものではありません。一人の人への支援は何通りか考えられます。いくつかある支援のうちの一つをその支援者が選択するにはその支援者の理念、経験、信条や価値観が影響しています。

8 支援の実際

(1) 行動障害の人とのふれあい

私たちの目の前に現れたときに激しい自傷行為があり、絶えず血を流している人がおりました。自傷行為を止められればより不快感、不安感を強め、抑制を振り解こうと強い抵抗を示します。おそらく自傷行為は、その人の不安が高まったときの対処のスキームなのです。強く自分の額を叩く行為は痛々しいのですがそれで自分をなだめているように、感情を中和させているように感じます。そこに叩いている自分と叩かれている自分がいます。

自傷行為の抑制、叩くのを止めることは本人にとって大変な圧迫と感じられます。抑えられれば、強い抵抗が生まれます。ここで支援者がより不安を感じ離れたら本人はより不安感、抵抗感を高め、大変な状態をつくることとなります。支援者は本人から完全に信頼を失います。行動障害は強度化されてしまいます。

自傷行為に関わる場合、抑制ではなく、安心感と優しさを込め、本人が安心感を持つまで長期的に忍耐強く付き合う意志が求められます。しかし、その間に本人の抵抗がさらに強まるということがあり得ます。それをその都度、優しさ、安心感で返していくことが求められます。それはそう簡単なことではありません。支援者自身の不安を克服していくことが求められます。本人からの強い抵抗は波のように訪れます。その都度支援者は本人を動揺無く対応し続けます。本人の抵抗は不安感から起こります。その不安は支援者の不安に通じあっているように感じられます。不安が無くなれば波は静まります。

自傷行為へのアプローチは、初めから述べている様に、出て来た行動を抑制するのではなく、その原因となる本人の不安、そこにつながり支援者の不安が問題であり、本人と支援者の相互の安心感をかかわりながら形成していくことが大切だと思います。

ただ、これについての支援を、こうした文章でこれ以上、正しく伝えることに限界があります。自傷行為はそれぞれみな違いがあります。本人も違えば支援者も違います。生活環境も違います。私は、不十分なドグマを放ってしまうことを恐れます。これから先は実際の現場に立ち会い、支援に関わって、お話ししていきたいと思います。

(2) 安心感を返していく

ちょっとした気に入らないこと、自分の思うようにならないことに過敏で腹を立て、暴力行為に到る方に対して、力で抑えることなど出来ない女性の支援者が本人の不快感をほとぼしらせる状態に対して、安心感を持った静かな、確信に満ちた対応をしている光景を見たことがあります。本人は、自分の内面をその支援者に曝しているかに思われます。しかし、その支援者に攻撃をし向けることはないのです。その支援者の安定した態度で、本人は徐々に安定していきます。大声を出し、持っていたコーヒー缶を投げ、その人は、高

ぶっていました。しかし、支援者の女性はそれを恐れるのではなく、怒るのでもなく、静かで落ち着いた眼差しを向け、対応していききました。

このシーンには行動障害への対応の重要な原点が含まれています。支援者が安心感を持って本人の訴えを受け止め、返していくという方法は、どのような人に対しても即効果があるとは言いにくいかも知れません。その様なことの通じないケースばかりだと言われてしまうのかも知れません。しかし、どうでしょうか。本当にそうでしょうか。あまりにも本人の気持ちが分かっていないのではないですか。例えば、一日中大声を出し、困りものように思われていた人が単に支援者が隣にいて、そっと存在感を伝えているだけで安心感を得たように弛緩し、寝てしまうというこれまでに無い様なことが起こりました。それは何を意味しているでしょう。私は奇跡のような支援を言いたいものではありません。誰もがごく当然と思うことがずっと行われなくて来たことを考えなければなりません。



寄せては返す大波のような不安を支援者の安心感で抱きしめる

波のように不安が訪れ、パニックを起こす人に対して、パニックの度に、支援者の安心感ある態度で落ち着くまで付き合うことを繰り返す。大きな波に耐えると、次第に落ち着き、不安が解消されていきます。

大波に揺さぶられる木の葉のような小舟



鏡ヶ浦の夕凪



関係性への支援のまとめ

1 関係性という基盤づくり

① 情緒的応答性

好意的感情の交流という情緒的応答が人と人との関係の実体。

② 問題解決

好意的感情の交流を妨げる問題を発見し解決する。

2 主体性を感じる

③ 内的動因の確認

本人の意図、意欲、関心、興味、要求といった内的はたらきの確認。

④ 自尊感情の回復

有能感、充実感、承認欲求、自己信頼感の回復

行動障害の位相

(1) 関係不安の拡大のステップ

① 感情的不整合

② 関係不安、警戒心の高まり

③ 自己調節機能の出現

④ 自他による行動の抑制

⑤ 本人の不安の高まり、周囲の不安の増大

⑥ 行動障害の出現

⑦ 本人の不安の増大と周囲の自信喪失

⑧ 自他による行動障害の抑制

⑨ 強度行動障害

(2) 関係の不整合をつくるもの

① 相互不安の存在

② 逆スパイラルによる相互不安の増大

(3) 繋合支援

① 思いを汲む。親和的対応

○ 本人の感情を感じる

- 本人の感情と支援者の感じ方、その違いを理解する
- 無理をして肯定することはマイナスだが、受け止めていく
- 本人の思い、イメージを感じる
- 本人の感情や思いは出にくい。とぎれやすい
- 自我のはたらきを感じられる表出と感じられない表出
- 本人と支援者との思いが繋合する体験を持つ

②安心感で返す

- 本人の思いを受けながら支援者が安心感を持つことが出来るか
- そのためには本人の問いかけに支援者が感情的に解決すること